

英国の映画&映画館事情 Chick flicks and Shoot em ups!

多くの外国人同様、私が日本を初めてみたのは映画、それも、映画 007 シリーズの ‘You Only Live Twice’ (007 は二度死ぬ) でした。ジェームズ・ボンドが東京や各地を訪れる様子を、子供ながらに夢中になって見ていたことをよく覚えています。‘チャーリーとチョコレート工場’の原作者としても知られるロアルド・ダールが脚色したこの作品の中で、ショーン・コネリー演じるジェームズ・ボンドは、若い美女たちと温泉でくつろいだり、両国で相撲を見物したり、舞台の 1 つとして使われたホテルオータニ (その時すでに ‘ニューオータニ’ だったでしょうか？ 随分歴史があるようですが。) に立ち寄ったり、神戸港で殴りあいのけんかを始めたり、姫路城で忍者と戦ったりしていました。

ちなみに、この映画は、ジェームズ・ボンドが、極めて教養があり、東洋の様式に精通しているのを証明することに役立ちました。彼は、お酒の熱燗に適切な温度さえ知っていたのですから…。(どうやら 36.9 度らしい。)

‘You Only Live Twice’ (007 は二度死ぬ) は、作成当時、メジャーな映画会社で豊富な予算のもとに作られ、大掛かりに宣伝された ‘blockbuster’ (大ヒット作品) で、アクションアドベンチャー映画の広いカテゴリーに入るでしょう。また、アクション映画の中でも、暴力的なものは、‘shoot em ups’ (撃ち合いの場面が多い映画、シューティングゲーム) とも言われます。

その他、映画にちなんだ英語表現としては、

‘chick-flick’ は 男性には耐え難く、女性向けの映画 のこと。‘romcom’ (romantic comedy) は ‘chick-flick’ の一例。

‘weepies / tearjerkers’ は涙が止まらない悲しい映画。

‘What’s on?’ は映画館で公開中の最新映画を知りたいときに、人に聞く表現。

これらの表現を会話で使うと、

What’s on at the Odeon? Oh just some awful chick-flick. I wouldn’t bother if I were you.

英国での映画人気は今も衰えることなく、2009 年のチケットの売り上げは、初めて一兆ポンドに到達しました。人気の理由は、バラエティに富んだ映画館が増えたことや、映画館の快適さやサービスが向上したことが関係しているようです。

例えば、ロンドンの最も美しい映画館は、豪華なインテリアとホグワーツタイプの塔がある **The Coronet** (www.coronet.org)。映画ノッティング・ヒルにも登場した **The Coronet** の対抗馬は、キャンベルタウンの映画的な景色が楽しめる、素晴らしいウオーターフロントにある **The Wee Picture House** (www.weepictures.co.uk) ?

グルメな人には、受賞歴のあるレストランがあるカンブリアの **Zeffirelli’s** (www.zeffirellis.com)、流行に敏感な人にはグラスゴーにある **the GFT** (www.gft.org.uk) がお薦めで、豪華なアールデコ調の建物の中に独創的な Café Cosmo があります。

ジェームズ・ボンドだったら、調節可能な黒い皮製の肘掛イスがあるゴールドクラスのラウンジを備え、英国で最も快適ともされているエジンバラの **the Dominion Cinema** (www.dominioncinemas.net) を選ぶでしょう。もしくは、毎回上映場所が変わる **the ‘secret cinema’** (www.secretcinema.org) にも魅かれるかもしれません。

‘You only live twice’ 以降も、映画 007 シリーズは 15 作品が作られ、世界中の映画館を賑わせています。日本はその後、作品の舞台にはなっていませんが、ショーン・コネリーは 1990 年代の初めに、英国のスーパースパイとしてそと日本に姿を現しています。彼のミッションとは？ ある日本の CM で、ハム製品の宣伝をすることでした。(彼は、日本酒の熱燗と同じく、ハムのパーフェクトな調理温度を知っているのかな??)